

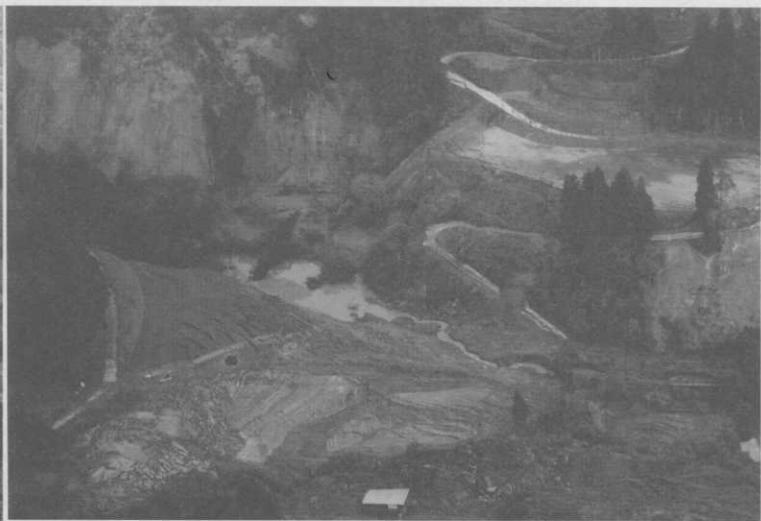


棚田ライタス

全国棚田(千枚田)連絡協議会

第37号 2005.3.31
(季刊・年4回発行)

発行／全国棚田(千枚田)連絡協議会
編集／ふるきやらネットワーク
〒169-0073 東京都新宿区百人町1-23-29-202
TEL 03-5389-9937 / FAX 03-5389-0078
<http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>



新潟県山古志村、災害直後の様子。山や棚田が崩壊し、道が寸断されている。災害による「自然のダム」が発生した。右下は、地震が起きた23日の翌日、24日早晨の避難の様子。写真提供 山古志村役場

山古志村は、人口2200人の小さな村でした。中山間地域という、生活するには厳しい条件のなか、生きてきた村です。けれども、私たちはこの地に誇りを持ち、この地を「日本のふるさと」として大切にしたいと思ってきました。

昨年10月23日、大切に守ってきた棚田、棚池が被害を受けました。棚田は、中山間地域の急峻で狭い地形のなか、人ができる限り耕地をつくり、利用してきた結果、機能として生まれたものです。そして、ここには生活をする人のおいがあります。だからこそ、この機能美が、都市の人たちに景観として見直されてきたと思っています。

震災以来、全村民が避難生活をしています。いままでも厳しい生活環境のなか生きてきただけに、互いに支え合ってきました。助け合うコミュニティの上に成り立ってきた村だったのです。いままさに、それが“財産”であることを実感しています。

今回、想像を超えた大きな支援をたくさんの人たちからいただきました。全国棚田(千枚田)連絡協議会からも支援をいただきました。ほんとうにあたたかいご支援をありがとうございます。災害前は「日本のふるさと」として心を伝えていきたいと思っているだけでした。けれどいま、こんなにも多くの方が2200人の村を応援してくださって、何かみなさんへ貢献できないかと思うようになりました。

今後、復興のなかで、自然と生きてきた中山間地域や棚田の精神を都会の方にも共有してもらうなど、社会貢献をしていきたい。過疎と闘い、私たちが身につけてきた自然とともに暮らす知恵を伝え、さらに都市と農村が手を取り合って、それぞれの良さを伝え合うことに貢献したいと思っています。

全国棚田(千枚田)連絡協議会をはじめ、棚田への思いを共有する人たちからの応援を受け、いまは感謝の気持ちでいっぱいです。(談)

想像を超えた
大きな支援を受けて

新潟県山古志村
村長
長島忠美

～山古志村役場からの現状報告～

「村に帰りたい。帰れる限り農業をする」

2004年10月23日、新潟県中越地方地震が起こった。全国棚田(千枚田)連絡協議会自治体会員でもある新潟県山古志村は、とくに被害が大きく、約2,200人の全村民が離村避難という状況にいたっている。現在も長岡市の仮設住宅での生活が続くな、19年ぶりの大雪に見舞われ、除雪をはじめ山古志村内でのさらなる被害拡大が懸念されている。

そんなたいへんななか、長岡市に臨時で設けられた山古志村役場・災害復旧本部五十嵐豊さんに、山古志村の棚田の状況や春からの農業の見込みをおたずねした。

——山古志村の棚田及び、農家の地震被害状況を教えてください。

全農家、全棚田が被害を受けています。ただ、山古志村は専業農家というのではなく、兼業農家ばかりです。棚田を池に変えて錦鯉を飼う「棚池」なども多く、棚田だけ、という家はありません。けれど、どの家も少なからず農業をしています。そういう村です。

被害の前の世帯数は、681軒。681のどの家も、どの耕地もすべて被害を受けているといえます。ただ、実際は被害がひどくて、道が寸断されていることもあり、現場に入れず、被害状況を把握できていないのです。

唯一、昨年秋、比較的被害が少なかつた地区、種芋原地区に、モデル調査として入ることができました。その結果、農地の70%が被害を受けていました。でも、残り30%も水を確保できるか、またこの春、大量の雪解けとともに地面のヒビに水が入って、地滑りが起こるかもしれないなど、この30%も被害がないとはいえないのです。錦鯉にしても約300万匹はいたのですが、そのうち80%がだめになっています。

——村民のみなさんのいまの心境や希望を教えてください。

みんな「早くうちに帰りたい」その一心です。いま、住民アンケートを取ったところですが、「村に帰りたい」という希望は村民の97%がもっていました。農業も、村に帰つてやれるのであれば、やる人は多い。村に帰れば、みんな必ず田んぼや畠はしますよ。村に帰れる限

り、離農を考える人はいないでしょう。

一方で、春から長岡市内で土地を借りて、長岡野菜を作ろうというグループが現れました。もともと村で直売所を開いていた5~6軒のメンバーが、動きはじめています。総勢40人ぐらいが、雪消えとともにはじめると思います。

——帰村の予定はいつでしょうか？

来年の9月を予定しています。

——では今年、村で耕作は行われるのでしょうか？

家がない人もいますし、耕地もすべてなくなってしまった人も多いです。わたしの家も農業をしていますが、家も田んぼも、水没と埋没と両方で全滅でした。

親父は「新しいところ（山）に（田んぼを）つくればいい」といっていますが、そこで水が確保できるかどうか、やつてみなければわかりません。

でも、何よりも農道など道ができるないと、村に入れませんし、新たに農地を確保しようとしてもむずかしいですね。

——つまり、村での耕作は今年は無理であろう、ということでしょうか？

まだ、人が入つていい状況ではないのです。普通、春になれば農道も除雪して、苗代をつくり、4月中旬にはすじ跡がはじまりますが、今年は、何よりも、

つていますから。けれど、まず道が復旧しないと入れないし、どこも復旧できない。復旧作業をしているのに、人が入り込むとじやまで作業にならないですから、工事優先です。

——まず、何よりも道の復旧作業がはじまるわけですね。

はい。まずは道。工事車が入るために道です。こうした復旧作業はこの5月ぐらいからはじめますが、できるところから行いはじめ、農地も部分的に復旧されていくと思います。国や県の支援を受けて原型復旧を目指していますが、どこまで戻るか……。

しかも今年は19年ぶりの大雪です。こ何年か、雪は少なくて2m50cmぐらいでしたが、今年は4mです。ですから、5月の雪解けを待つてみると本当の被害はわからないんです。毎年、雪が解けたあと春先に、地滑りが村のどこかであるのですが、地震被害の上に大雪でしそう。さらに災害を誘発しますよ。

また、昨年の7・13水害のあと、種芋原地区的県道が大規模に地滑りで壊れていましたね。秋、復旧工事がまさに入るうとしていたときに地震です。そこもどうなっているか。

——山古志村のみなさんは地滑りなど自然災害に対応して、比較的柔軟に対処する心持ちがある地域といえますか？

ええ、被害を受けた農地などのやりくりの仕方は、昔から慣れているといえますよね。ですからみんな、災害前と同じようにやる必要はない、と思っています。でも、ここまで被害がひどいのは、今回

がはじめてですよ。自立再建できる程度には復旧させたいですね。

——棚田をはじめ農業に対するボランティアなどの応援も今年はまだ無理、といふことでしょうか。今後、どんな手助け、手伝いができるのでしょうか?

具体的には、まず村に帰つてみないと

震災前の山古志村 山古志村役場提供

わからないのですが、復旧支援は国や県の力で支援してもらいますから、必要になるのはその後の「復興支援」です。これをお願いしたいのです。復興には、まさに人の手が必要です。2006年9月に帰村の見込みですが、それ以前に道路の環境が整うなど、復旧が終わつたところから復興がはじまります。

そうすると農地の復興などの手伝いも必要になつてくるはずです。

少しずつ、今年の秋には部分的に復興に入つていければと思つています。農業に関して現実には、トラクターをはじめ農機具も壊れたり、サビついたり、機械類がダメになつてしまふから、何もない状況なのです。そこから何ができるか、考えなければならぬ状況です。

——義援金などの振込先、ボランティアの相談先などを教えてください。

義援金は3月で終了です。今度は復興基金となります。

郵便振込 00540-5-44035

山古志村復興基金

会福祉協議会内) 電話 0258・46・8859

はまずは帰りたい、という気持ちが第一で、それが先決です。ですから、帰つてはじめて、その先を考えることができ、いかなる応援が必要なかも見えてくると思います。

——復旧後は、農地の集約や集団営農、生産組合などグループ化が進みそうでしょうか?

はい、そうです。中山間地域等直接支払制度で集落協定を結んだ内容が、理念通り、体制がとれていくと思います。

この被害で1人で作業することはむづかしくなりましたから、みんなでやろうという気運になっています。とくに避難生活によつて、そういう意識は強まりました。今年の雪下ろしも4人1組でパートイを組んで行っています。こうした集団での動きは進むと思います。

また、農道も細かい農道までは公的に復旧できませんから、みんなの道普請が必要になつてきます。もともと堀さらいやコンクリート固めなどはみんなでやつてきていますが、今回は、みんなで「から道づくり」です。ここには人手が必要です。手助けが必要ですね。ええ、確かに高齢化も進んでいますから、力を貸してほしいです。

8859
——いまはどんなボランティアを必要としていますか?

物資はもう充分にありますから、こうした物資の運搬をはじめ、除雪ボランティア、そして雑務一般の手伝いですね。復興がはじまるとき、ほんとうに人の力が必要になつくると思います。

——何か、ほかに伝えたいことなどありますか?

村に帰つて、がんばつてやりたい。いまは、その決意をお伝えするので精一杯ですね。

——ありがとうございました。

(構成・文:石井里津子)

新潟県山古志村の復興にご協力を!!

■復興支援へ寄付を!

郵便振込 00540-5-44035

山古志村復興基金

■マンパワーで復興協力を!

問い合わせ:山古志村ボランティアセンター
(村社会福祉協議会内)

TEL:0258・46・8859

中越地震被災地の復興に思つ

棚田学会副会長・早稲田大学名誉教授

中島峰広

天は、何故こんなにも意地悪なんだろう。地震で甚大な被害を蒙った中越地方は19年振りの大雪に見舞われているとのこと。重ねてお見舞い申し上げます。

被害地の人びとは、雪の下に埋もれている崩壊した農地を心配しながらもどうすることもできず、ただ家に重くのしかかる雪の下で耐えるだけの生活を強いられ、無念の思いで日々過ごされていることと思います。ことに、住み慣れた土地を離れ避難先で生活されている方は、その思いが一層強いのではないでしょうか。

しかし、雪国の人たちは、あの山古志

村小松倉の住民が戦争による中断をはさみ、16年の歳月をかけ1km近いトンネルをツルハシだけで掘ったように、あきらめることを知らない強靭な忍耐力の持ち主です。その耐える力で難局を克服し、復旧に向けて力強く立ち上がり、ふるさとの再建にとりかかられるものと信じています。

われわれは、日本一の棚田卓越地であるとともに、軟弱な地盤で地辺多発地でもある中越地方が地震の被害をうけたとき、農地の損傷が大きいのではないかと懸念致しました。限られた情報ですが、

現代市民の試金石——中越の棚田地域再生

棚田学会理事・東京農工大学教授

千賀裕太郎

「田んぼは美しい」という事実が日本で「発見」され、とりわけ美しい棚田の価値が「評価」されてから、たしかに10年ほどである。もともと、コロナブスによるアメリカ大陸「発見」と同様に、棚田の美は本来「発見」されたのではない。そのよう

い姿は、棚田地域が山間集落に単独で存在するのではなく、山から海までの河川流域が一つの運命共同体をなしているという現実を、あらためて私たち都市の人間に示したのである。

中越の美しい棚田の多くは急峻な地すべり地帯に立地している。これは、地すべり地形の形成過程で、むしろ水田稻作に相応しい土壌と水の条件がもたらされたからであり、そしてそのことを昔の人々が「発見」し、試行錯誤のうえ安定した水田経営に成功したからである。しかし

景観美は、棚田地域の人々が毎年毎期の莫大な労力・心血を注ぎ込んできた日常のなかで紡ぎだされた、大地に刻まれた作品なのだという事実を白日の下に晒した。そして、地震で形成された「自然ダメ」が下流の都市地域の安全を脅かして

いる姿は、棚田地域が山間集落に単独で存在するのではなく、山から海までの河川流域が一つの運命共同体をなしているという現実を、あらためて私たち都市の人間に示したのである。

農民は稻のない冬でも水田に水を張った。田の土を乾かすと、土が収縮して亀裂が形成され、その亀裂を伝って水が基層に届き、基層の上に形成される水の層が滑り面となって急激な土砂崩壊を引き起こすからである。また、毎年の田植え前の代掻き・畦塗りの作業は、単に田面を水平にして稚苗への水の過不足を防止するという営農上の目的だけではなく、水田での亀裂発生の防止や地すべりのために歪んだ畦や田の整形による急激な土砂崩壊防止の意味が含まれていた。

棚田地域の人々は、こうした厳しい生地すべり地帯は、まさに読んで字のごとく、火山灰性の表土が滑り落ちやすいといいう性質を持つている。それも例えれば毎年数センチずつ連続して土地が下方にずく、冬の田への水張りを逆手にとって錦鯉の飼育で成功し、また豪雪で陸の孤島化して多くの病人が命を落とす山村の現実を、金も技術も乏しかった戦中から戦後も、これをくいとめるために、中越の

崩壊して赤い地肌が剥き出しなった農地などの映像や写真などを見ると、心配が的中しているようにみうけられます。

これらの復旧は、雪解けを待つて始まることでしょう。激甚災害の指定を受けたことから、溜池・用水路・農道などの共有施設は国(90%)、市町村(10%)が負担して復旧が進められるとしても、個人の農地はなにがしかの受益者負担(10%程度)が課せられるものと思います。その時に、高齢者はどう対処するのでしょうか。後継者もなければ負担することを止め、農地を放棄することが危惧されます。

このことを考へるならば、復旧工事に用するのではなく、改良復旧への柔軟な対応が望れます。それは、今後放棄が予測される農地を集落で引き受け、集落の道を模索しようとするならば、最低限乗用型機械類の利用を可能にするため、各圃場への進入路を設けるなど、作業を容易にし、省力化することが求められるからです。いずれにしても、義捐金を活用するなどして、被害者の負担が少しでも軽減されるような施策の展開を開くべきことには計り知れないものがある。

「必ず村を復活する」という棚田再生に向けた村の人々の強い意志に、私たちはどう応えるのか。棚田の美を「発見」した語る日本の国民が、棚田地域の復興にどのような支援をするのか。雪に埋もれた美しい棚田が、問い合わせてくる。

元気よ、届け！ 山古志村へ応援コンサート



3月6日(日)、新潟県長岡市立劇場（新潟県長岡市）で「新潟県中越大震災復興応援コンサート」実行委員会が、中越大震災復興応援コンサート「心の橋をかけよう」を主催し、山古志村を応援した。（実行委員会は長岡市の有志で結成。後援：長岡市、小千谷市、山古志村、各教育委員会、棚田学会、全国棚田（千枚田）連絡協議会、棚田ネットワークほか）

◎
3月6日、長岡市で開催いたしました中越大震災復興応援コンサート「心の橋をかけよう」が、大きな拍手のなか幕を降ろしました。

（実行委員会は長岡市の有志で結成。後援：長岡市、小千谷市、山古志村、各教育委員会、棚田学会、全国棚田（千枚田）連絡協議会、棚田ネットワークほか）

当日は、棚田学会副会長・棚田生もお忙しいなか、駆けつけて下さり、1320名の入場者とともに、元気溢れるひとときをつくることができました。

応援コンサートは2時間にも及び、舞台では、山古志村中学生を含む地元小中学生と大人たちを合わせて計100名が、ふるさとややらばんの劇団員と一緒に歌って合唱しました。

山古志村の長島忠美村長からは「本当にありがとうございました」と熱い握手をいただき、来場者のお一人お一人から「一緒に復興しようという気持ちが伝わった」など声をかけていただきました。

ご後援、ご協力下さいました皆さまには心から感謝申し上げるとともに、ご報告とさせていただきます。

（「新潟県中越大震災復興応援コンサート」実行委員長・駒形晃一（長岡市在住）、ふるさとくらばん劇団員一同）

徳島県上勝町で平成17年度からオーナー制度開始 「樺原の棚田村」から「お見合いから」どものお披露目まで



徳島県上勝町樺原では、平成10年4月に「樺原の棚田村体験」が始まりました。樺原地区の6戸の農家により、「樺原の棚田村」（代表・谷崎勝祥）組織が発足され、棚田耕作体験の受け入れを行いました。当初10グループの募集をかけましたが、最終的に14グループの応募があり、検討した結果、14グループ全てを受け入れることになりました。

棚田耕作体験は、まず、「棚田選び・お見合い」から始まりました。参加者が一同に棚田とお見合いし、自分たちの気に入つた棚田と「婚約」するといったものです。「婚約」が成立した後、参加者は、「樺原の棚田村ファミリー」となり、「田植え・結婚」「草取り等・新婚生活」「稻刈り・出産」「収穫祭・ことものお披露目」と、実りある1年を過ごしました。

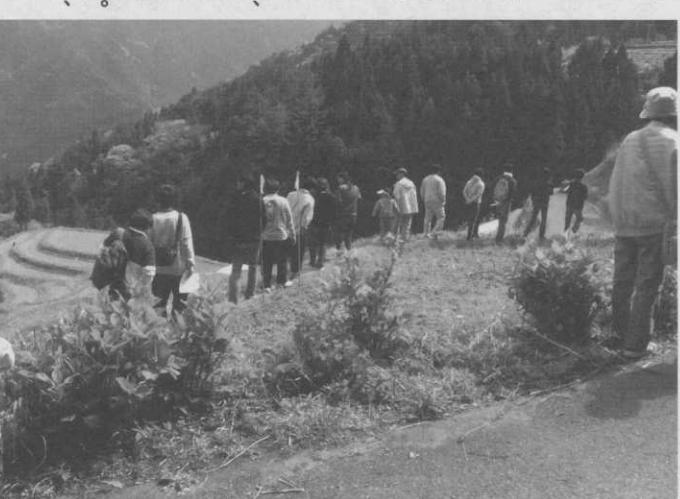
しかし、平成16年は、例年なく自然災害の多い年で、その上、動物被害も出るなど、「新婚生活」では、大変な苦労がありました。

倒れた稲を起こし、動物を追い払い、案山子を立て、棚田村ファミリー総出で見守り続けました。例年より「こども出産」は少ない数となりましたが、それでも「我が子」はアミリーにとっては宝物です。「このお披露目」では、みんな笑顔で、かわいい「我が子」の試食を行い、その恵みに心から感謝しました。そして、この1年、棚田村ファミリーは、本当の家族のように絆を深めることができました。

（「お披露目」を楽しむ棚田村ファミリー）

起こし・結婚準備」「田植え・結婚」「草取り等・新婚生活」「稻刈り・出産」「収穫祭・ことものお披露目」と、実りある1年を過ごしました。

しかし、平成16年は、例年なく自然災害の多い年で、その上、動物被害も出るなど、「新婚生活」では、大変な苦労がありました。



棚田とお見合いをする参加者。14グループ約60名の応募があった

村」は、「体験」から「オーナー制」へと移行を進めています。「樺原の棚田村」も全国の棚田農家同様、後継者問題を抱えながら、その美しい実りある景観を残そうと、一生懸命、誇りを持って守って行こうとしています。棚田に足を着けて、大事に植えた青い苗が、豊かな黄金色の稲穂へと変わっていく、その豊かな自然の恵みと日々の営みへの感謝を忘れないために。

（樺原の棚田村事務局 花岡史恵）

平成12年度に導入され、5年間続けられた中山間地域等直接支払制度。平成17年度からの継続を本協議会でも求めてきたなか、昨年末、さらなる継続が決まった。その内容と取り組み対策について、直接支払制度に詳しい東京大学大学院小田切徳美助教授に寄せていただいた。

直接支払制度のゆくえ

—次期対策のポイントと取り組み方—

東京大学大学院 助教授 小田切 徳美

1、現行対策の成果と課題

5年間の中山間地域等直接支払制度が今年度で終了する。先頃発表された最終的な直接支払実施面積は、対象農地面積の85%をカバーしている。これは、関係者からはかなり高い実施率と評価されている。しかし、同時に、残る15%の農地では、集落がこの制度を活用したくとも活用できない状況にあると問題提起されている。それは、しばしば「限界集落問題」と呼ばれている。

また、集落協定による活動内容を見ると、協定締結農地のほぼ全量が、現実に農地として保全されている。さらに、協定を締結した地域では、様々な活動が再活性化しており、中山間地域の再生へ向けた基盤づくりがなされているという評価もある。しかし、他方では、「5年経てば平均年齢が5歳高齢化する」ような実態が中山間地域には確かに見られる。そのため、直接支払い制度においても、特に協定の継続性を強化する営農システム

ム面の前進をさらに図るべきであるという指摘がなされている。このような成果と課題を前提にして、次期対策が検討されたのである。

2、次期対策の仕組み

2005年度から始まる次期対策の全容は、現時点ではまだ明らかでない。しかし、現在までに判明している内容を見ると、「2段階の加算」が新たな特徴と言えそうである。以下、その概況を説明しよう。

まず、加算前の基礎部分は、「通常単価の8割」が交付される協定となる。ここで要件は、現行対策で要求されている一般的な集落協定のそれにはほぼ相当する。

しかし、この点には不満があるにしても、新たに導入された加算システム自体は、前向きに評価できるものである。第1に、現行対策の実施過程でも、協定内容とその活動の熟度により、加算を考えるべきだという現場の声は少なくなかった。もちろん、条件不利性の補填(ほてん)を目的とする

本制度には、加算は論理的には整合的なものではない。しかし、他方では、制度の最終的な目的である耕作放棄発生防止という観点から見れば、協定や地域社会の持続性の強化に資する取り組みには、追加的な支援がなされるべきという意見にも合理性がある。有効に機能する加算とは言

付金単価ははじめて「通常単価」、すなわち「10割協定」となるのである。

したがって、次期対策は、家の造りに喻えて言えば、2つの

階段(加算)がある「3階建」というよりも、むしろ「地下1階・地上2階建」と言える。実質的な基本単価が、「8割」レベルに引き下げられ、いわば地下にあるからである。

しかし、この点には不満があるにしても、新たに導入された加算システム自体は、前向きに評価できるものである。第1に、

現行対策の実施過程でも、協定内容とその活動の熟度により、加算を考えるべきだという現場の声は少なくなかった。もちろん、条件不利性の補填(ほてん)を目的とする

3、地域における対応のあり方

新たな當農システム構築等、特に協定の持続性の確保を意識した制度設計であると理解することができる。

このように解釈する時、いま地域が取り組むべきことは明らかであろう。それは、より多くの交付金の獲得をインセンティブ(動機)としつつも、協定の持続性強化を真の目的として、できるだけ多くの協定が「協定継続加算」を取れるように、地域レベルにおける話し合いを進めることであろう。

とはいっても、「8割協定」の存在を否定すべきではない。こうしたタイプの協定も、条件不利性の補正から考えれば、「8割」ではなく「10割」であるべきであろう。しかし、その問題とは別に、さしあたり考えるべきは、「8割協定」に当面はならざるを得ない協定が、「10割協定」にステップ・アップすることをいかに支援するかであろう。そうしたステップ・アップへの誘

この加算部分は、「協定継続加算」(筆者による仮称)と言えよう。そして、この加算を加えて、交

次期対策の仕組みをこのよう

に解釈してみれば、それは現行対策の実施状況の限界を認識して、

導こそ、次期対策における県や市町村の役割であろう。先発事例の紹介などの適切な情報提供等に加えて、例えば地方自治体の単独予算による、移行のためのさらなるインセンティブ付けなども考えられる。

また、冒頭でも触れたように、現行対策でも既に「限界集落」



金賞作品「霧に包まれて」

とやまの棚田写真展大盛況！

「とやま棚田ネットワーク」で、募総数は1331点に達しました。平成17年1月18日審査し、富山県農林水産部長賞1点、(社)富山県農林水産公社理事長賞1点、とやま棚田ネットワーク会長賞6点をそれぞれ選定。2月2日NHKをはじめ報道機関の取材のなか表彰式を行い、副賞に棚田はさがけ米を贈呈しました。

は、今回県民の皆さんに棚田の持つ素晴らしさを知っていただきたく、「とやまの棚田写真展」を実施しました。

富山県内の棚田を対象に、「守り伝えよう棚田のぬくもり」をテーマに、平成16年4月1日から12月31日の間作品を募集、応

が問題となっている。次期対策では、この問題にさらに力を入れて対応する必要があろう。從来は任意とされていた「集落の将来像の明確化」は、次期対策の「8割協定」でも必須となつた。その点で、限界集落にとって、ハードルはより厳しくなつたといえるが、同時に、限界的集落が

現実に「集落の将来像の明確化」により、再び活力を取り戻した事例もある。限界的な集落のハードルとしてではなく、地域再生の欠かせない手段として、こうした集落が「将来像の明確化」に取り組むことを、関係者は特に支援すべきであろう。

今や棚田保全活動に不可欠となる「中山間地域等直接支払制度」の継続が昨年末に決定され、地域農業者や自治体関係者の安堵感が伝わってきます。しかし、次期制度の取組要件は中山間地域に多く見られる自己完結型農業から脱却し、集落ぐるみの農業経営組織の構築や棚田オーナー制度等都市住民との交流促進など、より具体的な活動が求められています。

この活動が一層注目される機會が、9月2日～3日に四谷千枚田を中心に愛知県鳳来町にて開催される、第11回棚田サミットです。愛知万博「愛・地球博」の期間と重なり、世界中から多くの人たちが訪れ、昨年の「国際コメ年」に引き続き、米の重要性また棚田の偉大さを四谷千枚田から発信できるものと思います。このサミットには、全国各地から多くの皆さんに参加していただきたいと思っています。

さて、恵那市も昨年10月に合併し、事務局担当者の異動もあり、会員の皆様にご迷惑をお掛けしましたが、1年間事務局を担当することができます。皆様のご協力に際し、心よりお礼申し上げます。

事務局ニュース

事務局、岐阜県恵那市からのお知らせコーナーです

「富山県農林水産公社」
（富山県農林水産公社）

いずれもオーブンスペークスのため正確な見学者の人員は把握できませんでしたが、大勢の見学がありました。「富山にもこんなにすばらしい棚田があるのね。」「写真の所に行くにはどうするの。」「棚田は日本だけと思っていたがアジアの棚田もすばらしい。」「お米ってすばらしいんだ。」等の声を多數いただきました。

声援を頼りに今年も挑戦

について話し合いを進めています。現在、農林水産省の食料・農業・農村基本計画の見直しによる農業政策の転換が審議されている中、地方では市町村合併が全国的に進められています。当協議会の自治体会員の多くが合併や合併予定になっています。その中でも、自治会員同士が含まれる5つの合併があり、その結果、会員の減少につながっています。この状況

【事務局変更のお知らせ】

なお、4月からは事務局が佐賀県唐津市（旧相知町）0955-62-2368に変わります。今後ともよろしくお願いいたします。
(2005年3月吉日)
平成19年第13回以降のサミット開催地が未定です。棚田の重要性を伝えるためには欠かせないイベントです。サミットの継続のため、各地域でのご検討をお願いします。

第11回全国棚田(千枚田)サミット・ニュース

2005年9月2日(金)～3日(土) 愛知県鳳来町にて開催

テーマ「緑と水と心のオアシス」

今年の愛知県は、2月17日の「中部国際空港の開港」、3月25日から9月25日まで開催される「愛・地球博」と何かと話題の多い年です。その中で愛知県の東部に位置し、長篠合戦や1300年の歴史を誇る鳳来寺山、日光・久能山と並ぶ三東照宮の

一つ鳳来山東照宮など観光地としても有名な鳳来町で「第11回全国棚田(千枚田)サミット」が開催されます。

メインテーマは、「緑と水と心のオアシス」とし、自然の中の棚田、ありのままの棚田を見て(棚田散策)、また話し合って(分科会等)いただきたいと思っています。

鳳来町の棚田は見事な石積みとそれ以外にも、空(青)と山(緑)、水(青)と棚田(緑)が真正面から全てを見渡せる光景は、日本一ではないかと自信を持っております。

このような典型的な中山間地域では、「中山間地域等直接支払制度」は欠かせないので、この制度が継続されることには、大変意義深いことあります。

(鳳来町 産業観光課 田中宏典)

鳳来町四谷千枚田

「自立的かつ継続的な農業生産活動等の体制整備に向けた前向きな取組」を協議していただきたいと思います。

また、分科会では、メインテーマにも掲げてあります「緑(森林)と棚田」「水(水源)と棚田」を考え、改めて棚田の必要性、そこに生活する人だけではなく都市住民の心のオアシスとなることを広めたいと思います。

そして、実際に耕作される農家の方(百姓)に集まっていただき、棚田の耕作の苦労、棚田の自慢を語り合つ場を設けて、棚田を愛し耕作している人々の心を一つにしていただきたいと考えています。

なお、鳳来町は、十分な施設も設備もなく、暑い中参加いただける皆さんにはご迷惑をおかけしますが、大きな面積の小さな町の素朴な棚田サミットに、ノーネクタイ、歩きやすい服装では非お越しください。また、開催中の「愛・地球博」にもお立ち寄りください。

■「棚田の自然景観と文化景観」

春山 成子 編著

東京大学大学院助教授の春山氏が、福岡県星野村での、自らの3年間の棚田調査結果を軸に、

棚田と景観を分析した一冊。最後は「支援される側から環境学習の場の提供への転換」や「文化的景観としての棚田の使命」

棚田の保全・中山間地域活性化のための全国組織

全国棚田(千枚田)連絡協議会

お申し込み・お問い合わせは協議会事務局

恵那市経済部農業振興課

〒509-7292 岐阜県恵那市長島町正家1-1-1

TEL:0573-26-2111 FAX:0573-26-2861

協議会HP: <http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>

BOOKS

■「信州発 棚田考 中山間地域の新たな動き」

木村 和弘 著

信州大学農学部教授の木村氏が棚田や里山を歩き、地元「伊那毎日新聞」に連載したコラム

をまとめたもの。農村に住みながら現場からの視点で農村を眺め、棚田での農作業、整備、里山の土地利用などさまざまな角度から考察してある。四六版224ページ。随所に写真や図面などがあり、わかりやすい。定価1500円+税。発行・ほおずき書籍 発売・星雲社

編集後記

今回は、新潟県山古志村の状況をお聞きし、お伝えいたしました。たいへんななか、快くご協力をいただきました。大きな痛みを抱えながらも、話すことが務めという覚悟で話してくださったように感じています。ほんとうにありがとうございました。

本協議会には、都市住民の会員の方も多くいらっしゃいます。山古志村への復興に1人でも多くの方が協力を、と願います。そして、どうぞライステラスにみんなさんの支援活動レポートをお寄せください。お待ちしています。

平成16年度は、ほんとうに災害の多い年でした。棚田地域はとくに災害を機に離農、もしくは集落営農などの集団化、新たな動きが出てきているようです。こうした情報も追って紹介していきたいと思います。

石井里津子

会員募集中